

96年5月15日の夕刻、沖縄の人々の温かい拍手に迎えられ那覇市内の余儀公園に到着しました。3日間、60キロを歩いて身体中がクタクタのはずなのに不思議と心は軽やかでした。

最後まで歩き切った満足感と、今「日本の未来・アジアの将来をかけて真剣に闘っている地」に私も立っているという一種の幸福感で胸が熱くなっていました。

「沖縄へ行かないか」という話しが飛び込んできたのは、4月中旬のことでした。「歩くこと」の大変さより「行きたい」思いの方がはるかに強く、すぐに「OK」しました。

平和行進参加者は、行進途中に平和祈念資料館とひめゆりの塔、さらに米軍に追い詰められ住民と日本兵が真っ暗な中で息を潜めて、3ヶ月以上もじってしていたガマ(鍾乳洞)を訪れました。そこで沖縄戦ショッキングな事実の数々を知らされました。

その事実とは、日本軍が住民に手榴弾を手渡し、集団自決を強要したり、病人には青酸カリを配り自殺を促したということや、方言を使うとスパイとして捕らえたという許しがたい行為でありました。

献身的な看護活動が続けた女生徒(ひめゆり部隊)は、「解散命令＝銃弾の嵐」の中で多くの若い命を散らせました。日本軍が、母親たちに壕の中で泣く赤ん坊を黙らせること(＝死)を強制した話しも聞かされました。

「沖縄戦」、それは「本土決戦」を遅らせるための捨て石だったといえます。

この異常な状態の中で、軍隊の本質も露呈しました。いざという時、軍は決して住民を守る存在にはなりません。逆に住民を敵の盾にするという事実を沖縄戦は教えてくれました。

「基地の島・沖縄」は、今「本土」の私たちに問いかけています。『平和は武器では守れない。あなたたちも立ち上がってほしい』と訴えています。

相手が石を持てば、さらに大きな石を持ちたくなります。すると相手は別の凶器を用意します。さらに、こちらはより強力な武器を…。「こんな愚かな繰り返しはやめよう！」と叫び続けたいのです。二度と過ちを繰り返さないために武器を捨て去り、全て「話し合い」で解決する姿勢をもたねばならないと思います。

日本はアジアの一員であるという自覚がもっとも必要ではないでしょうか。

21世紀を生きるわが子らに「アジアの一員として誇れる」平和な日本の基礎を築くのは私たちの責務です。

敗戦に至るまで、全ての国民(無理やり日本人にされた人々も含め)が、「同じことを考え、同じ行動する」ことを徹底的に教育されました。

方言や自分の国の言葉で語ることができなかったのです。「違い」を主張することが許されない時代でした。『「違い」を認め合い、大切に育み合うこと。「同じ」ことを強制されることに拒否する姿勢を持つこと。』それが「いつか来た道」の再現を許さないことにつながると確信します。

琉球王国は誕生以来400年間に渡って「武力」を持たず、交易でもって日本を含むア

ジアの人々との交流を続けてきました。琉球の人たちは元来「争い」を好みません。

沖縄は基地撤去後、再び『「舟楫(しゅうしゅう)を以(もつ)て万国の津梁(しんりょう)となす」＝船と“かじ”でもってあらゆる国々へのかけ橋となる』南の国際交流拠点構想の実現を望んでいます。

私たちは、沖縄の姿勢に勇気づけられて帰ってきました。

---